

茶仙の詩
ちやせん

春日茶山病不飲酒 因呈賓客
しゅんじつノちややまやまいニテさけヲのめず、よりてひんかくニていヌ

杜牧
とほく

笙歌登畫船 十日清明前
しょうかヲ どうジ がせんニ とおか、せいめいのまえ

山秀白雲膩 溪光紅粉鮮
やまハひいで、はくうんハつややかニシテ たにハひかりテこうふんあぎやかナリ

欲開未開花 半陰半晴天
ひらかんとほつしていまだひらかざるはな なかばくもり、なかばはれタルてん

誰知病太守 猶得作茶仙
だれかしる やまいノたいしゅ なおえたるハちやせんトなることし

【現代語訳】

春日の茶山行事に、大切な客人を連れて湖洲に船で遊覧したが、
しゅんじつ ちややま ことしゅう
病気で私は酒が飲めないので、座興にこの詩を差し上げることにした。
びやうきでわたしは酒が飲めないので、ざきょうにこの詩を差し上げることにした。

杜牧（唐代の詩人）

笙と歌い手を遊覧の船に乗せて賑やかなのだが、あと十日で清明節だ。
ふえ
山は美しく、白雲は肌の様に滑らかで、溪は歌姫の唇のような花が咲く。
山は美しく、白雲は肌の様に滑らかで、溪は歌姫の唇のような花が咲く。
咲こうとしても未だ開かぬ花々よ、半ば陰り、半ば晴天というところか。
咲こうとしても未だ開かぬ花々よ、半ば陰り、半ば晴天というところか。
誰が知るものか、病気の郡長官など。ま、酒仙はダメでも茶仙には成れる。
誰が知るものか、病気の郡長官など。ま、酒仙はダメでも茶仙には成れる。
ちやせん

令和六年一月二十日

大中臣正比呂 拙訳

